


補 足 資 料

目 次

- ・ 補足資料 1-1
地下水流動モデル解析による施策のアイデアの効果検証（1）
－自噴井戸での不用な地下水湧出抑制の効果－
- ・ 補足資料 1-2
地下水流動モデル解析による施策のアイデアの効果検証（2）
－冬水田んぼの効果－
- ・ 補足資料 1-3
地下水流動モデル解析による施策のアイデアの効果検証（3）
－南川下流域における誘引涵養の効果－
- ・ 補足資料 2
小浜平野の地下水の現状
- ・ 補足資料 3
委員会議事概要および視察会概要

●補足資料 1-1 地下水流動モデル解析による施策のアイデアの効果検証(1)

【予測ケース1】自噴井戸での不用な地下水湧出抑制の効果検証

<p>施策内容の説明</p>	<p>自噴井戸の場合、バルブが取り付けられてないと地下水が常に湧き出します。水を使っていない時でも湧き出したままの事例が多いことから、自噴井戸にバルブをつけるなどして自噴状態を止めれば地下水を節約する(水位を上昇させる)ことが可能です。</p>	 <p>自噴井戸で湧いている地下水がそのまま排水路に出ている様子</p>
<p>予測解析の内容</p>	<p>小浜市域にある全部の自噴井戸で自噴を止めた(いわば、自噴井戸が存在しない)状態を設定しました。</p>	
<p>条件や留意点</p>	<p>自噴した地下水を使っているケースも当然多い訳ですが、ここでは自噴が完全に止まった状態での効果を予測しました。</p>	

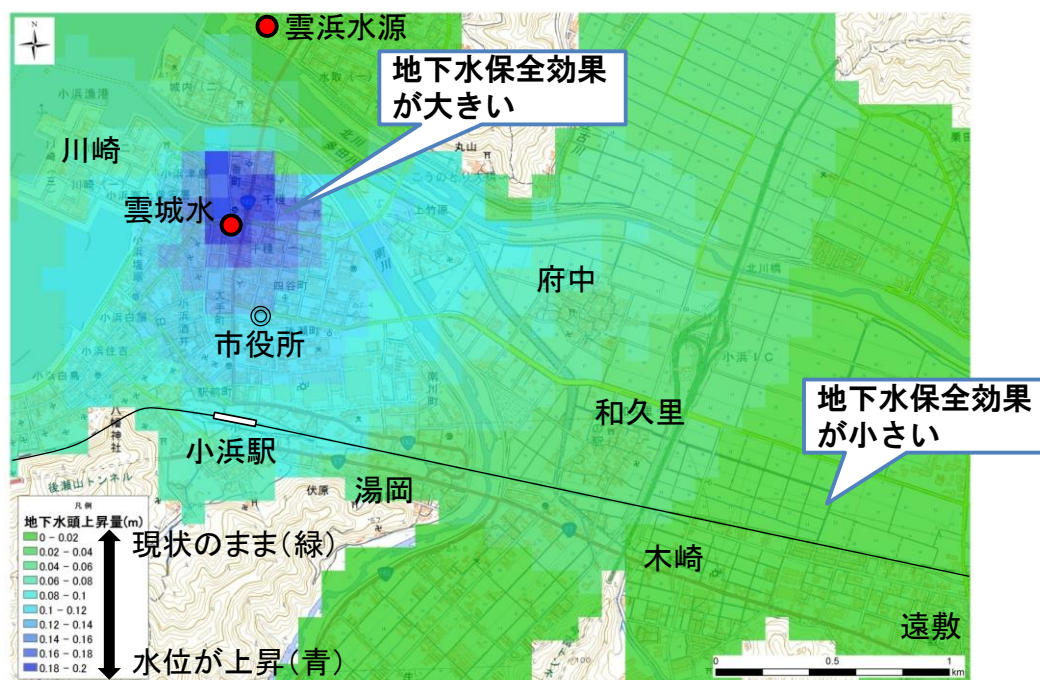


図 自噴を完全に停止させた時の深い地下水位の水位上昇量分布

■ 予測結果

- ・ 自噴量が現状より約 3,700m³/日減少するため、市街地を中心に最大 0.2m の地下水水位上昇が生じ、地下水の保全に相応の効果があることがわかりました。

●補足資料 1-2 地下水流動モデル解析による施策のアイデアの効果検証(2)

【予測ケース2】冬水田んぼの効果検証

施策内容の説明	平成 26 年度時点で冬水田んぼは、太良庄や加茂等で 17ha ほどの範囲で実施されていました。この冬水たんぼをより広範囲で行い、水田から浸み込む水を増やして地下水涵養量の増強を図ろうというものです。
予測解析の内容	H26 の実績を踏まえ、同じような場所(地区)で実施面積が 10 倍の 170ha に拡大したことを想定して、解析条件を設定しました。
条件や留意点	実施時期は 11 月から 3 月の 5 ヶ月間としました。冬水田んぼに必要な灌漑用水は無条件に確保されるものと仮定しました。

H26年実績 冬水田んぼ面積：17.4ha (実施率1%)



想定 冬水田んぼ面積：170ha(実施率10%)



解析条件	平野全体の地下水涵養量	
冬水田んぼ 面積17ha	43,400 m ³ /日	
冬水田んぼ 面積170ha	44,400 m³/日	増強率 約2%

■予測結果

- ・地下水涵養量は 2%程度増えることから、冬水田んぼ実施域の近辺では多少なりとも地下水位は上昇すると判断されます。
- ・ただし、平野全体や上水道水源付近での地下水位の上昇は見込めません。
- ・明瞭な効果をもたらすには、相当大規模に実施する必要があるようです。

●補足資料 1-3 地下水流動モデル解析による施策のアイデアの効果検証(3)

【予測ケース3】南川下流域における（河川水伏没の）誘引涵養の効果検証

施策内容の説明	川からの伏没による涵養を受けている浅い地下水の性質を利用し、その地下水位を井戸での汲み上げにより下げて伏没を活発化させ、浅い地下水の供給量を増やそうというものです。
予測解析の内容	南川右岸の2ヵ所で浅い地下水を対象とした井戸を新規に設定し、浅い地下水位が低下した時の南川における伏没量変化を確認しました。
条件や留意点	新設井戸の揚水量は2ヵ所合計で3,000m ³ /日としました。

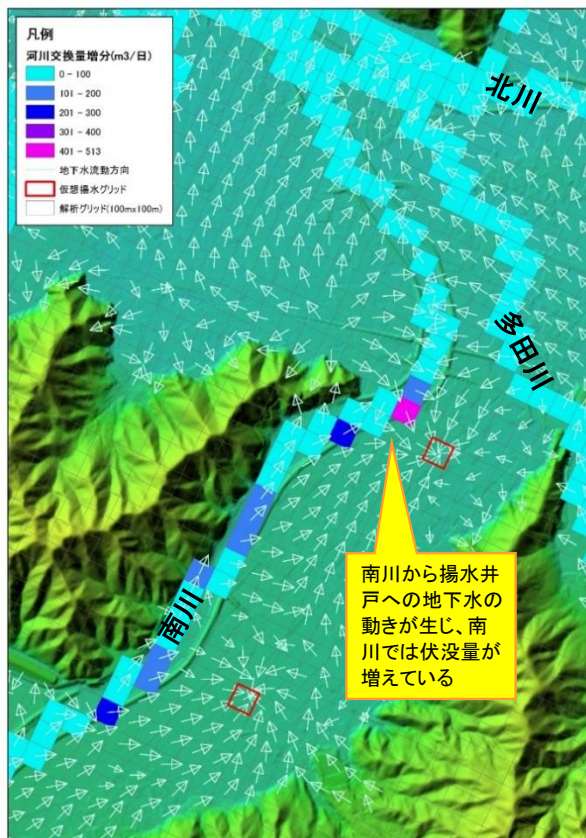


図 新規揚水に伴う川底での伏没量増加および地下水が流れる方向の分布

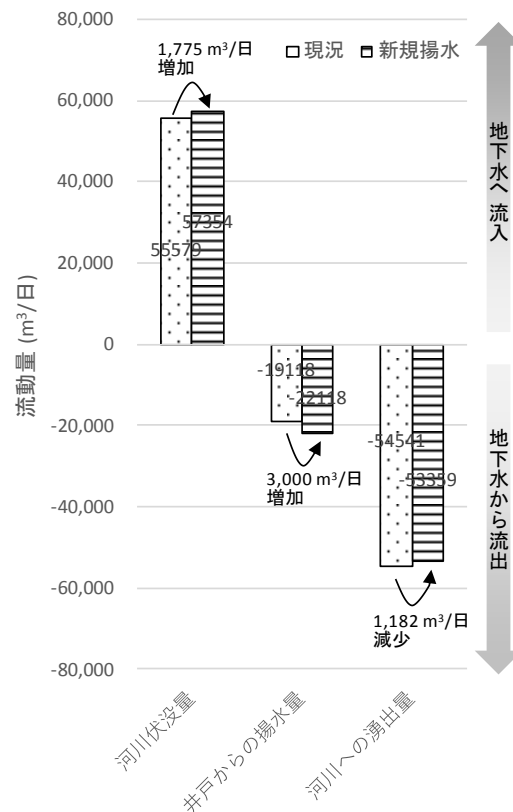


図 川底での伏没量と湧出量の新規揚水の有無による比較

■予測結果

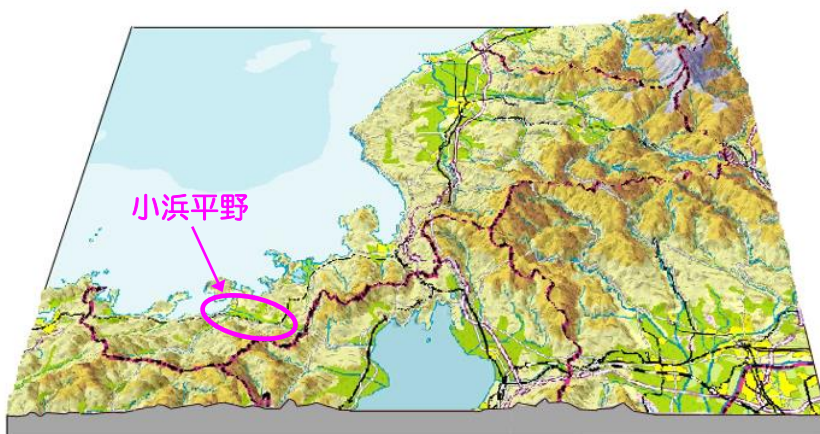
- ・ 新設井戸での揚水量は、南川を含む川底での伏没量増加と現状で生じていた湧出量の減少によって賄われる結果となりました。
- ・ このことから、浅い地下水の揚水量を増やしても川からの伏没で補填され、地下水位の低下は抑制されると判断できます。したがって、地下水の状況を大きく変化させずに南川からの誘引涵養を行うことが可能といえます。
- ・ ただし、河川の維持流量確保の問題、既存浅井戸への影響、汲み上げた地下水の利用方法など、検討すべき課題も多くあります。

●補足資料2 小浜平野の地下水の現状

本文1章と同様に「小浜平野地下水調査業務」で明らかとなった小浜平野の地下水の現状について、まとめました。

■ 地勢

小浜平野は福井県の南西部にあり、リアス式海岸を呈する若狭湾の中央に面して位置します。東側から流下する一級河川の北川、南側から流下する二級河川の南川の下流域に広がる平野で、海岸域に小浜市の市街地が形成されています。



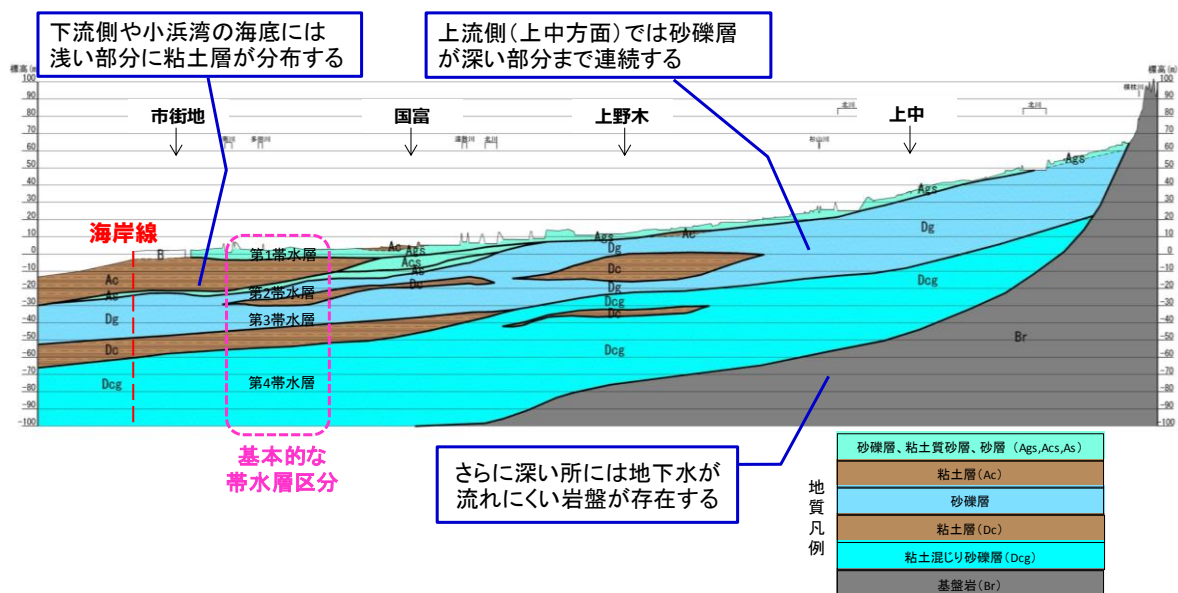
■ 地形

河口付近には三角州性低地、中～上流には扇状地が分布する沖積平野です。周囲を緩やかな起伏の山地が囲んでいます。縦断延長は北川沿いで長く 15km、南川沿いで短く 6km 程度である一方、横幅は 1～1.5km と細長い平野形状をしています。

■ 地質と活構造

山地部は、古生代から中生代にかけての丹波層群の岩盤で構成されます。北川流域には粘板岩や砂岩、凝灰岩などが分布し、南川流域には主に粘板岩が分布しています。北川の流路と平行するようにして、横ずれセンスを持つ熊川断層が分布します。

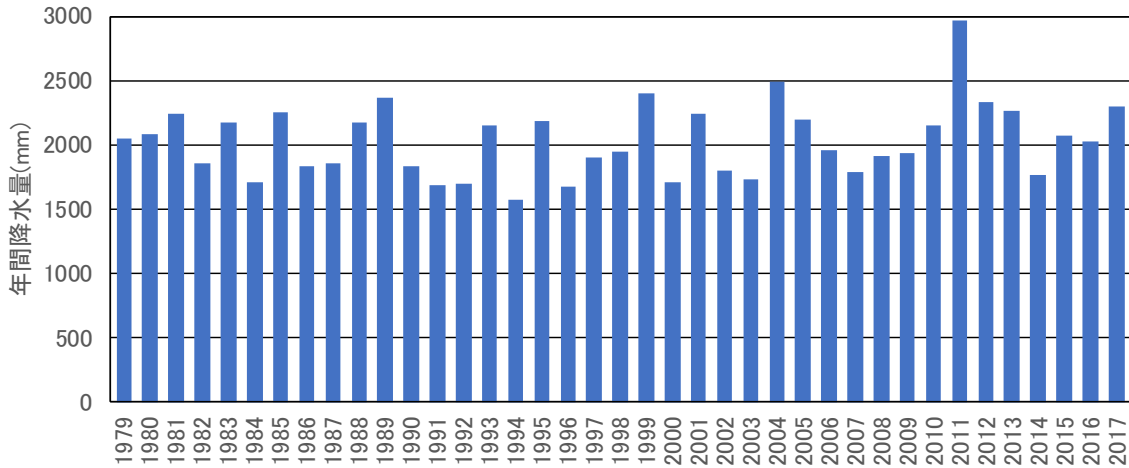
小浜平野の地下は、更新世から完新世にかけての厚さ数 10～100m の未固結堆積物が分布します。砂礫層が主体ですが、下流ほど粘土層が多くなる傾向にあります。



■ 降水量

小浜平野は日本海気候区に属し、冬季に雪が多く降るのが特徴です。

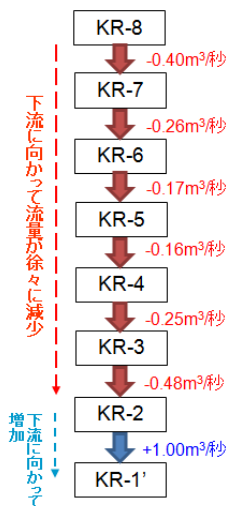
気象庁の観測によると、小浜平野では年間 2,032mm の降水があり（1979～2017 年の平均）、日本の平均降水量 1,668mm（国土交通省 平成 30 年版日本の水資源より引用）よりも多くなっています。なお、1979 年以降での経年的な増減の傾向はとくに見られません。



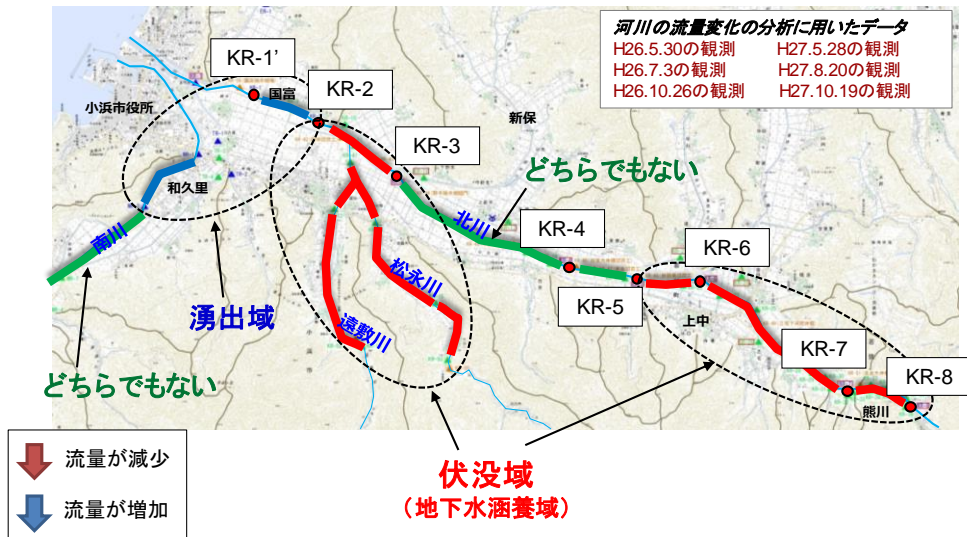
■ 河川流量から判断される伏没の状況

河川流量観測のデータを用いて上下流での河川流量の変化を整理すると、北川、松永川、遠敷川において下流に向かうほど流量が減る傾向があります。川底での伏没によって河川水が地下水に変わり、その分流量が減っていると考えられます。

北川での流量の比較
(H27年10月19日観測)



各河川での伏没卓越区間と湧出卓越区間の分布状況

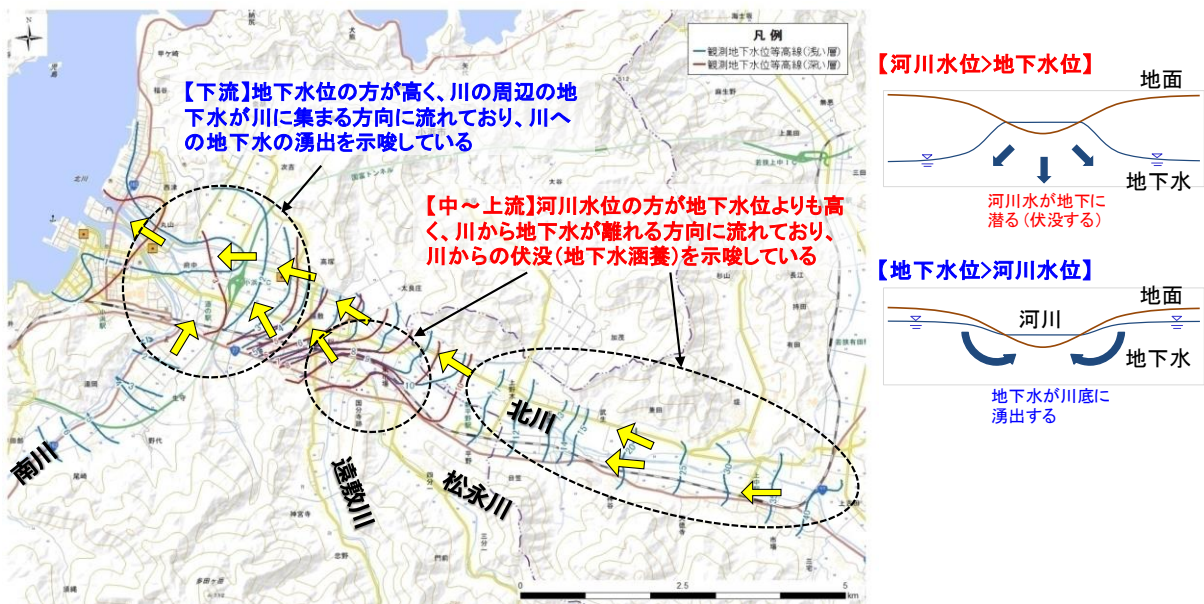


■ 地下水位分布

地下水位観測データを用い作成した小浜平野の地下水位等高線図によると、北川沿いの上～中流では川と交差する等高線が下流に凸の形状になっています。このことは河川水位が地下水位より高いことを表しており、川底での伏没が生じやすい状態にあると言えます。一方、下流

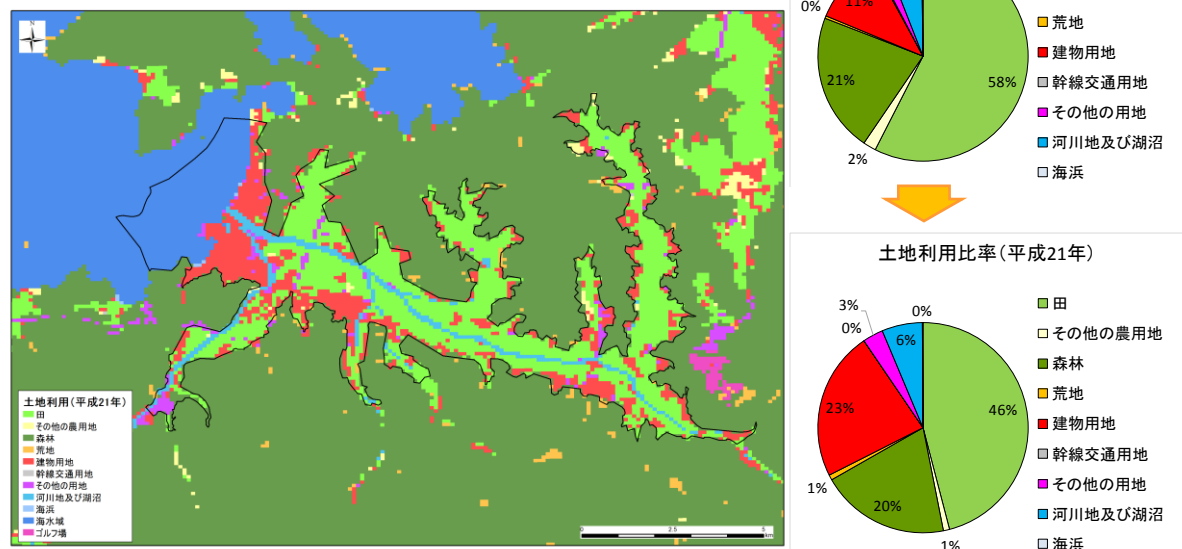
では上流に凸の形状になっているため、地下水が川底に湧出しやすい状態にあると言えます。

こういった地下水位分布（等高線の形状）から推察される河川の伏没区間は、流量観測結果から見出される伏没卓越区間とも整合的です。



■ 土地利用

国土交通省の国土数値情報データに基づくと、小浜平野における平成21年時点の土地利用は、田畑がもっとも広い範囲を占めています。これを過去(昭和51年)の土地利用比率と比べてみると田畑から建物用地への転換が進んでいる状況が認められ、海岸部一帯が次第に建物等に被覆されつつある状況です。

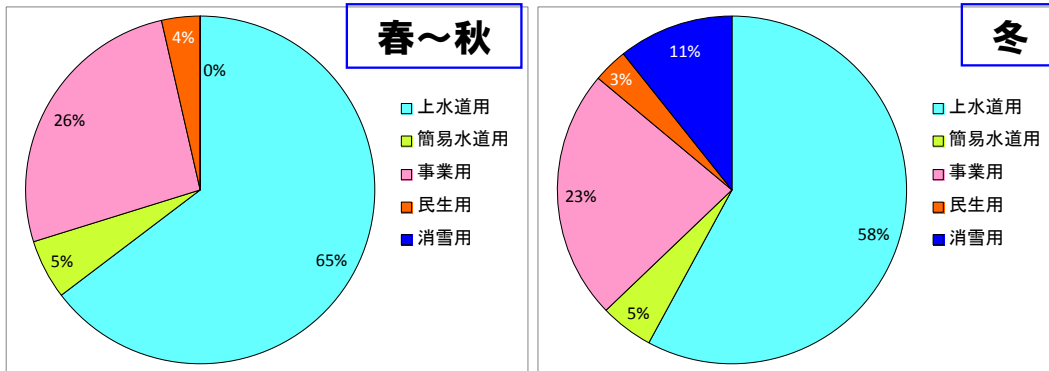


■ 井戸揚水量（小浜市域で集計）

消雪装置が稼動しない春～秋の揚水量は、1日あたり 15,000m³程度と想定されます。上水道用での揚水が 65%となっています。冬になると消雪用での揚水量が加わることで、16,800m³/日に増加します。

消雪揚水量は、過去の実測値やポンプの運転状況を基に推計しており想定域は出ませんが、ピーク時には最大 24,000m³/日に達する可能性があります。この値が正しければ瞬間的ではあるものの全体で 40,000m³/日近い揚水が行われていることとなります。

用途	1日あたりの揚水量 (m ³ /日)					
	春～秋		冬			
			期間平均		降雪ピーク時	
上水道用	9,756	65%	9,756	58%	9,756	25%
簡易水道用	835	6%	835	5%	835	2%
事業用	3,919	26%	3,919	23%	3,919	10%
民生用	541	4%	541	3%	541	1%
消雪用	0	0%	1,807	11%	(最大) 24,000	61%
合計	15,051		16,858		(最大) 39,051	



■ 水収支と地下水収支

小浜平野全体での表流水と地下水の動きを数値モデル化し、平水年における1日当たりの水の移動量を右上表のように求めました。入る側と出る側の内訳を見ると、上流山地から流れてくる河川水量と河口から海に流れ出ていく河川水量が、ともに大半を占めます。

次に、地下水に関する量をまとめたものが右下の表です。入る側を見ると、地表面での涵養（水田浸透を含む）と川底での伏没がほぼ同じでになっています。出る側を見ると、川底で河川に湧出する量が80%に及ぶ一方、少ないながら地下水として海側に流れ海底に湧出している地下水があります。

収支量 (m ³ /日)		北川沿い	南川沿い	平野全体	
入る側	降水	208,400	108,400	316,800	15.4%
	河川流入	674,600	1,065,300	1,739,900	84.4%
	地下水流入	2,400	1,700	4,100	0.2%
	合計	885,400	1,175,400	2,060,800	
出る側	蒸発散	71,600	31,300	102,900	5.0%
	井戸揚水 (自噴を含む)	22,800		22,800	1.1%
	河川流出	805,100	1,141,800	1,946,900	93.9%
	地下水流出 (海底湧水)	400		400	0.0%
合計	899,900	1,173,100	2,073,000		

収支量 (m ³ /日)		平野全体	
入る側	地下水涵養	58,000	49.3%
	地下水流入	4,100	3.5%
	河川伏没	55,600	47.2%
合計	117,700		
出る側	井戸揚水 (自噴を含む)	22,800	19.4%
	河川湧出	94,500	80.3%
	地下水流出 (海底湧水)	400	0.3%
合計	117,700		

●補足資料3 委員会議事概要および視察会概要

以下の委員会と視察会の開催概要を次ページ以降に整理しました。

開催日	会議名
平成28年 7月8日	平成28年度 第1回委員会
7月25日	市内現地視察会（小浜市内）
平成29年 1月11日	平成28年度 第2回委員会
5月26日	平成29年度 第1回委員会
5月31日	先進地視察会（富山県黒部市）
平成30年 6月27日	平成30年度 第1回委員会
9月7日	平成30年度 第2回委員会
11月7日	平成30年度 第3回委員会

平成28年度 第1回小浜市地下水利活用・保全検討委員会 議事概要

日 時：平成28年7月8日（金） 14：00～16：30

会 場：市庁舎3階 防災対策室

出席者：小浜市長（あいさつのみ）、委員19名（全21名委員名簿参照）、オブザーバー（関係課4名）、事務局3名、日本工営4名。

（議事内容）

○委嘱状の交付

○市長あいさつ

○委員の自己紹介

座席順に自己紹介

○委員会設置要綱について

設置要綱 第9条の一部を変更（「会長」を「委員会」に変更）

変更前：

（公開）

第9条 委員会の会議又は議事録は、原則として公開するものとする。ただし、会長が特段の理由があると認めるときは、会議及び議事録の全部又は一部を非公開とすることができる。

変更後：

（公開）

第9条 委員会の会議又は議事録は、原則として公開するものとする。ただし、委員会が特段の理由があると認めるときは、会議及び議事録の全部又は一部を非公開とすることができる。

○会長、副会長の選出

会長：谷口 真人 委員

副会長：田原 大輔 委員

○協議事項について

- （1）小浜平野地下水調査業務 調査結果報告、質疑 →議事録参照
- （2）委員会の目的、方向性、人員構成等について →承認（挙手多数）
- （3）委員会運営、スケジュールについて →承認（挙手多数）

※委員会終了後、協議事項（1）の延長質疑応答実施

現地視察会（市内） 概要

日 時 : 平成 28 年 7 月 25 日 (月) 9 : 00 ~ 12 : 00

視察場所 : 市内 (別紙参照)

出席者 : 委員 14 名 (全 21 名委員名簿参照)、日本工営 4 名、事務局 4 名

(視察内容)

○市内の水源や湧水地などの現地視察を行った。

地下水利用の現状を把握し、今後の委員会の参考とする。

①川崎井戸ポンプ・観測井

- ・川崎井戸ポンプ使用状況を吉村委員から説明 (参考資料 1)。
- ・観測井 (台場浜公園) について日本工営から説明 (測定方法など)

②津島名水・雲城水

- ・津島名水、雲城水について田原副会長から説明 (水位および水温などの測定)。
- ・雲城水について利用状況などを上田委員から説明。(参考資料 2)

③四谷公園・広峰神社

- ・小浜土木事務所の今井氏から県の消雪パイプについて説明。(参考資料 3)

④国富湧水

- ・国富地区の湧水状況について田原副会長から説明。

⑤遠敷水源

- ・市上下水道課から上水道水源の 1 つである、遠敷水源について説明。(参考資料 4)

⑥松永川・遠敷川

- ・松永川、遠敷川の伏没について田原副会長から説明。

⑦湯岡水源

- ・市上下水道課から上水道水源の 1 つである湯岡水源について説明。

⑧総括

- ・食文化館にて視察総括

平成28年度 第2回小浜市地下水利活用・保全検討委員会 議事概要

日 時：平成29年1月11日（水） 14：00～16：00

会 場：市庁舎4階 大会議室

出席者：委員19名（全21名委員名簿参照）、事務局4名、日本工営2名

（議事内容）

○報告事項

・分科会（利活用、保全）の内容について

⇒**まとめの資料を一部訂正（誘引涵養について具体的なメニューの追加）**

○協議事項について

（1）分科会から見えた課題について

①地下水の水量・水質の低下

②地下水の恵みや価値が活かされていない

③市民の地下水の理解が進んでいない現状

⇒**課題について新たに下記の項目を追加**

④**流域全体とした連携の構築**

⑤**地下水の自噴が見える重要性**

⑥**地下水利用に関する無駄について**

※今後の分科会などで課題追加の可能性あり

（2）先進地視察先および時期について

⇒**黒部を予定**

（3）全体スケジュールについて

⇒**まとめの資料の内容について優先度を各委員に付けてもらい**

全体的に優先度が高い内容について今後の分科会で議論を進めていく

※**小浜市の考える優先度も示す**

（4）その他

・提言内容のまとめ方について（熊本の事例報告）

⇒**名水保護・活用プロジェクトの提言書（平成22年3月）を追加**

○研究報告

「江戸時代以降の小浜市地下水利用および雲城水利用者への現地アンケートの結果について」

報告者：総合地球環境学研究所 プロジェクト研究員 王 智弘 氏（博士：国際協力学）

平成29年度 第1回小浜市地下水利活用・保全検討委員会 議事概要

日 時：平成29年5月26日（金） 16：00～17：30

会 場：市庁舎4階 大会議室

出席者：委員14名（全21名委員名簿参照）、オブザーバー1名、事務局3名、日本工営1名

（議事内容）

○協議事項について

（1）分科会について

①分科会（H29.3.31）報告

②分科会の進め方について

→アンケート結果から今後協議していく内容を3つのカテゴリーに分けて進めていくことで了承を得た

・ A：項目内での重要度が高いメニュー（上位1～2もしくは1～3）

利活用・保全合わせて17メニューあり2回の分科会に分けて協議予定

・ B：項目内で重要度が分散しているメニュー（標準偏差の数値が高い）

利活用・保全合わせて6メニューあり1回の分科会で協議予定

・ C：A・B以外の項目であり、重要度も平均的で、分散もしていないメニュー

利活用・保全合わせて16メニューあり1回の分科会で協議予定

※別紙H29年度スケジュール（案）参照

（2）年間スケジュールについて

→提言に向けた具体的な協議を分科会で実施し、10月の委員会で提言書の素案について協議

（3）黒部視察について

・視察日程について

・質問確認

→委員から出た質問を新たに追加（別紙：事前質問リスト参照）

（4）その他について

・平成28年度の委員会での取組みをHPにアップすることについて了承を得た。

→平成29年6月1日に市のHPにアップ済み

先進地視察（黒部市）概要

日 時 : 平成 29 年 5 月 31 日 (水) 11:00~16:00

視察場所: 黒部市内

出席者 : 委員 11 名 (全 21 名委員名簿参照)、日本工営 2 名、事務局 3 名

視察内容

①黒部市役所: 地下水の概要や市、地域の取組み及び状況の説明。

小浜市からの事前質問への回答

→ (別紙 1 参照: 黒部市 Q & A)

→ (別紙 2 参照: 黒部市提供資料)

②湧水めぐり: 生地地区内の湧水巡り (観光ガイドの案内)

→ (別紙 3 参照: 湧水巡りながれ)

③ J R 新幹線「黒部宇奈月温泉駅」

→新幹線駅での「湧水 P R モニュメント」と「観光ギャラリー」の見学

黒部市役所での Q & A

Q 1 : 生地地区の各清水の掘り抜き深さと自噴量は?

A 1 : 深さ: 不明 (地元民が掘ったため)。

自噴量: 湧水量は各井戸によって異なる (別紙: 水質調査結果参照)

Q 2 : 共同井戸の管理に関して、市から補助等の支援は?

A 2 : 共同井戸を使用する地元民で管理。市からの補助等はない。

Q 3 : 漁協における地下水使用量は?

A 3 : 漁協で使用しているが量は不明。

Q 4 : 地下水を活用したイベントの予定および規模は?

A 4 : 生地地区の清水めぐり (常時実施、黒部市観光の 2 つ目のスポットとしている)。

市が主催のフルマラソン前日の「生地まち歩きフェスティバル」(別紙チラシ参照)。

Q 5 : 市内の積雪および除雪状況は?

A 5 : 積雪量が山側と海側で大きく違う。 山側: 387cm 海側: 103cm

除雪状況: 地下水、河川水、上水利用

Q 6 : 消雪井戸の本数、消雪パイプ延長、地下水利用量は?

A 6 : 消雪井戸: 52本 全長 33.5km 地下水使用量は不明。

Q 7 : YKKをはじめとする企業（工業用）の地下水使用量は？

A 7 : 公害防止協定（排水基準など）を市と締結している企業がYKKを含め4社あり、毎月使用量の報告がある。

年間で約463万m³（YKK）その他3社合わせて248万m³

※YKKでは、節水に取り組んでおり使用量は年々減少している。（YKK設立当初は地下水利用について苦情が出ていたが、会社での節水活動や環境保全など取り組みが認められ市民との信頼関係ができています）

Q 8 : 黒部市水資源対策協議会の概要と取り組み内容は？

A 8 : 市が事務局 地下水の安定供給と利活用促進を目的にS59年に設立。

大学、JA、企業、土地改良区などの地下水利用の関係団体で組織。（※市民代表はいない）黒部市地下水について周知するためのパンフレットなどを作成（別紙；水のめぐり）。

Q 9 : 水質検査に関して、消雪利用時の地下水位低下前後で水質検査をしているか？また、経時的な水質検査は？

A 9 : 地下水位低下前後（消雪利用時）では水質検査をしていない。

消雪装置稼働中でも生地地区の水位はあまり変化なく、自噴も止まらない。

年1回（10～11月） 飲用井戸の水質検査を実施（衛生面での調査）

伝導率について測定箇所によってはわずかに上昇しているが、研究段階であり、行政の対応などは実施していない。

Q 10 : 地下水調査に関して、降水量変化による水収支変化データなどの詳細なデータを提供してもらうことはできるか？

A 10 : 地下水調査のデータは国交省の事業で調査した水収支データを引用している。

参考資料：水めぐりパンフレット（国交省調査の水収支データを利用）

沢スギ周辺の長期水位水温観測

Q 11 : 住民の意識について、湧水の保全や利活用に関して過去から現在までに至る経緯やどこが主体となって湧水事業を進めたのか（住民、自治体、事業者など）？

また、現在の湧水保全や利活用に至るにはどのような対策をされたのか？

A 11 : 井戸水を生活用水としている地元住民から清水は自然発生的に生まれた。水の利用場としては市が整備した。保全活動などは地域住民主体で実施している。

Q 12 : 上流の森林整備について何か対策などは？

A 12 : 現在は対策をしていない。（過去には植林など実施していた）

地域の自主活動で森林保全がされている。

Q 13 : 地下水涵養推進の取り組みは？

A 13 : 取り組みはない。

Q 1 4 : 水道料金は？

A 1 4 : 別紙新水道料金表参照

Q 1 5 : 住民への広報活動（節水や地下水への感謝など）は？

A 1 5 : 観光メインのパンフレットが多かったが、水についてより詳しく知ってもらうためのパンフレット（別紙：水のめぐり）を作成し市民にも広報として利用している。

パンフレットは web にアップしている。

市の広報誌でも特集（名水百選の 3 0 周年を記念）。

名水会：大人向けの講演などを実施

黒部水の少年団：小学生向け。黒部川の生き物調査や清水の調査などを実施。

日本黒部学会で自然や水について発表を実施

立山黒部ジオパークとして黒部広域でのフィールドワークを実施（主体は民間、市が支援）

市長発信で名水会などの活動を実施してきた。その活動に民間が賛同して今に至る。

保育園や小学校で水に関する活動を実施

Q 1 6 : 黒部市の地下水を利用したインバウンドの効果は？

A 1 6 : 中国、香港、台湾からの観光客が多い。ガイドも中国語対応（タブレットなどで）

地元が率先してインバウンド対策をしている。

湧水の豊富さに驚かれる人が多く、ペットボトルなどで持ちかえっている。

その他：

- ・黒部市の地下水量：1 億 3 6 5 0 万 m³（H 2 3 年調査）
揚水量：2 8 0 0 万 m³（H 2 2 年調査）→地下水量全体の約 2 0 %
- ・黒部市の公共上水の利用率は、7 2 % で残り 2 8 % が井戸水などを利用

平成30年度 第1回小浜市地下水利活用・保全検討委員会 議事概要

日 時：平成30年6月27日（水） 15：30～17：10

会 場：市庁舎4階 大会議室

出席者：委員16名、小浜土木事務所1名、農林水産課1名、商工観光課1名、事務局3名、
日本工営2名、

（議事内容）

○協議事項について

（1）提言書の全体構成について

- ・ 図表による説明やコラム記事の挿入を多くしつつ、内容を深く知りたい場合にも読み込むことで対応できる程度での文章は記載する方向で、提言内容の再検討と修正を進める。
- ・ 事務局案の「はじめに」「基本理念」および行動メニューに関して、小浜の特徴や小浜らしさの記述が少ないので、その部分を再考するとともに、「現状と課題」の説明文を追加する。

（2）提言書の重点プロジェクトについて

- ・ 地下水保全の重点プロジェクトとして条例制定を求める意見が多いことを踏まえ、条例制定の可能性に関して引き続き検討する。
- ・ 3つのテーマで最低1つの実現性の高い重点プロジェクトを設定し、その代表重点プロジェクトは確実な実践を提言で求めることとする。
- ・ 当面の代表重点プロジェクトは以下とする。→保全＝消雪装置の節水対策、利活用＝道の駅の親水公園整備、調査教育＝学校教育もしくは地下水イベント。
- ・ 分科会で出されたアイデアを全部掲載するか、実現性などの視点で絞り込みもしくは統合整理を行うか、引き続き検討する。

（3）提言書作成スケジュールおよびワーキング会議について

- ・ 代表重点プロジェクトを具体化するためのワーキング会議を設置し、そこで検討する。ワーキング会議への参加者は全委員とはせず、有志での参加者を募り運営する。

（4）提言のスローガンについて

- ・ 出された案の中からアンケートを実施して絞り込み、その結果を基に次回委員会で議論して最終的なスローガンを決定する。

（5）その他

- ・ 提言を出した後のフォローアップを適切に行えるよう、関係部署を含めた検討を事務局側で進める。

平成30年度 第2回小浜市地下水利活用・保全検討委員会 議事概要

日 時：平成30年9月7日（金） 15：30～17：15

会 場：市庁舎3階 302 防災対策室

出席者：委員16名（全21名中）、小浜土木事務所1名、都市整備課1名、農林水産課1名、
商工観光課1名、事務局3名、日本工営2名、

（議事内容）

○協議事項について

（1）提言のスローガンについて

- ・投票の結果、「天からの恵み 湧水のまち おばま ～御食国おばまは 湧水の都です～」を提言のスローガンに採用する。

（2）重点プロジェクトについて

- ・各重点プロジェクトの取組内容を同じフォーマットで再整理し、提言の本文に挿入する。
- ・道の駅傍の自噴井戸を整備するプロジェクトに関し、既存井戸は目立たない場所にあるため、駐車場の中などより目立つ場所に井戸を新設する意見も多いことを提言書に記述する。

（3）提言書の構成および内容について

- ・提言内容を説明する文章がまだ曖昧、抽象的であり、誰がどのような行動をすべきかが明瞭に読み取れるように具体的に記す方針で全般を修正する。
- ・具体的な行動内容を記述する際に、委員会で議論した内容やアイデアをできるだけ取り込むようにし、これまで議論した結果との間にギャップが生じないように留意して作成する。
- ・市民の代表である委員会が小浜市に対して提言するという位置づけで、提言の文章や表現方法を改める。基本的には、市が行動すべき（市に求める行動の）内容を記述する。
- ・過年度の地下水調査での結論や成果を引用する場合は、その出典が地下水調査であることを明記する。
- ・地下水条例を制定するという行動メニューについて、具体的な条例案をこの委員会で策定して提言書に盛り込むことまでは時間的に困難だが、条例制定に対する意見、とくに保全すなわち規制目的での条例制定の意見が多いことを踏まえて、提言内容を再検討する。
- ・地下水調査業務の結論あるいは今後の水道事業と今回作成する提言をどのように関連付けていくか引き続き検討し、なんらかの形で文章化して提言書または付随する資料や書面に盛り込む。

（4）スケジュールについて

- ・提言書の内容等に関する修正意見が多かったことから、もう一度委員会を開催して出席委員の間で改めて提言書案の内容を議論し、内容の充実化を図る。
- ・最終的な提言とりまとめと市長への提出は、現状のスケジュール通り11月とする。